

論文の要旨

論文題目 日本における韓国語学習者の学習動機と
態度に関する社会言語学的研究

—日本人と在日韓国人の意識の相違—

氏名 金 由那 (kim yu na)

学位 博士 (学術)

授与年月日 平成 18 年 3 月 27 日

本研究の背景

日本における韓国語学習者は、ほとんどが日本人と在日韓国・朝鮮人であるが、従来、両者は区別されて考えられてきた。日本人にとっての韓国・朝鮮語はあくまでも外国語の一つであるに過ぎないのに対して、在日韓国・朝鮮人にとっての韓国・朝鮮語は決して外国語ではない。それは、祖先の言葉、民族の言葉であり、それを学習することは民族の血と伝統を継承・保持する重要な手段であるとされてきたからである。しかし、最近、日本各地の民族学校は、在日韓国人と日本人が同じ教室で机を並べて韓国語を学習する「共生学習」の場となっている。従来両者の間に存在していた距離感を埋めるという意味でまさにそれは「共生」の場であり、真の「共生」へと発展させるための重要な基盤を提供するものである。しかし、その一方で、「共生学習」は在日韓国人における民族教育としての韓国語学習の性格を大きく変質させ希薄化させる結果を招いている。

第 2 章で、先行研究および統計資料に基づき、日本における韓国・朝鮮語教育の歴史と現状を、在日韓国・朝鮮人と日本人の場合に分けて概観した。

本研究の目的

在日韓国人と日本人が韓国語を「共生学習」することが珍しくない状況になっていることに着目し、そのような状況で韓国語学習の動機付けや態度において両者の間にどのような違いがあるのかをアンケート調査を通じて明らかにするのが本研究の目的である。主たる目的は在日韓国人学習者と日本人学習者の相違点を解明することであるが、国籍差の他に回答者の属性や学習経験要因についても検討した。

調査の概要 (第 3 章)

自由記述式の予備調査により本調査に用いる質問項目を選定した。本調査は、2003 年 10 月から 2004 年 3 月までの期間に、日本人 334 名と在日韓国人 96 名の韓国語学習者を対象

として、3種の韓国語教育機関（名古屋韓国学校、大学、文化センター）で実施した。調査内容は、1) 回答者（調査対象者）の属性に関する情報、2) 韓国語学習の動機に関する質問、3) 韓国・韓国人・韓国語に対するイメージに関する質問、4) イメージ以外の学習態度に関する質問、5) 学習経験要因に関する情報である。

調査結果および考察

第4章では、韓国語学習の動機付けに係わる21の調査項目に対する回答結果を分析・考察した。因子分析の結果、〈メディア興味動機〉、〈韓国理解動機〉、〈義務・必要動機〉、〈単純・好奇心動機〉の4因子が得られ、これを動機付けの程度を測定する尺度とした。国籍差を検定すると、動機付け全体では在日韓国人の方が日本人よりやや高かったが、大きな差はない。つまり在日韓国人も日本人も同程度の動機付けを持って学習に臨んでいると解釈される。因子別に見ると、〈韓国理解動機〉は4因子の中で最も平均値が高い。〈メディア興味動機〉はさほど強い因子ではないが、本研究の調査が韓流ドラマブーム以前に行われたものであることを考えると、現在ではかなり強い因子として作用しているかもしれない。〈メディア興味動機〉と〈韓国理解動機〉には国籍の差は認められないが、残る2つの因子については、在日韓国人と日本人とのあいだで顕著な対照が見られる。在日韓国人においては〈義務・必要動機〉が〈韓国理解動機〉に次いで2番目に優勢な動機因子として作用しているのに対して、日本人の場合には〈単純・好奇心動機〉が2番目に強い因子である。これは、日本人学習者が総体的に外国語の一つとして韓国語を気楽に学んでいるのに対して、在日韓国人では民族語として韓国語を意識し、自己のアイデンティティーの確立の手段として韓国語を学習するというように義務的動機付けが強く働いていることを示していると考えられる。言語生活環境が日本人とほとんど同じになっている在日韓国人三世、四世にとって、観念的に与えられた条件だけでは韓国語学習の努力を続ける動機としては不十分であり、それを補強する他の動機付けが必要と考えられるが、非常に高い数値を示している〈韓国理解動機〉をさらに強化するように図ることが、日本人、在日韓国人を問わず、今後の韓国語学習にとって有効ではないかと考えられる。

学習経験要因として、韓国訪問の回数、韓国人友人の数などを調べたが、この点で国籍差を見ると、韓国人友人の数では、在日韓国人が平均7.29人、日本人が平均2.06人と、かなり顕著な差が見られたけれども、韓国訪問の回数においては、在日韓国人平均4.58回、日本人4.24回とほとんど開きがない。韓国を祖国と見る人とそうでない人とで韓国訪問の回数に差がないということは意外な事実である。そこには、在日韓国人が韓国を訪問したいという気持ちを妨げている何らかの力が働いているのではないかと考えざるを得ない。

第5章では、韓国語学習者が韓国、韓国人、韓国語に対してどのようなイメージを抱いているかを調査するための質問52項目の回答結果を分析・考察した。因子分析により、「韓国語イメージ」として1因子、「韓国イメージ」として〈開かれた社会観〉、〈活力ある社会観〉、〈歴史的社會観〉の3因子、「韓国人イメージ」として〈積極評価〉、〈感情評価〉、〈消

極評価)の3因子が得られた。

これらの因子と回答者の属性および諸学習経験要因との関係を分析した結果、国籍に関しては、〈韓国語イメージ〉因子、「韓国イメージ」の〈歴史的社會観〉因子、「韓国人イメージ」の〈消極評価〉因子において有意差が検出され、いずれも在日韓国人の方が日本人よりも高い数値を示している。前2者については予想通りの結果であるが、〈消極評価〉因子において在日韓国人が有意に優勢の評価をしていることは、彼らの意識の世界に両面価値 (ambivalence) があることを示すものとして注目すべき結果である。

学習者経験要因とイメージ因子との相関関係をまとめると次の表のとおりである。

	韓国人友人	韓国訪問	学習期間	韓国語能力
韓国語イメージ	相関度 (中)	相関度 (低)	相関度 (中)	相関度 (高)
開かれた社會観	相関度 (低)	—	—	—
活力ある社會観	相関度 (中)	相関度 (高)	—	相関度 (高)
歴史的社會観	—	—	相関度 (高)	相関度 (中)
積極評価	相関度 (高)	—	—	相関度 (中)
感情評価	相関度 (高)	相関度 (高)	相関度 (高)	相関度 (高)
消極評価	—	—	相関度 (中)	相関度 (中)

*相関度(低)は $p<.05$ 、相関度(中)は $**p<.01$ 、相関度(高)は $***p<.001$ を表す。

その他の学習意識に関する調査項目については、在日韓国人と日本人の間にほとんど差は認められなかった。相違点を解明するための調査において、相違点が検出されなければ意味がないということになるのであるが、本研究の調査の場合には必ずしもそうではない。違いが予想された2つの集団に違いが認められなかったことは、両者が基本的に同じ性質を持っている集団であることを積極的に支持することになるからである。本研究は、在日韓国人と日本人が「共生学習」することが当然のことになりつつある状況で、両者の意識がどのように異なっているかを調査することが主たる目的であった。その結果、民族意識に関わる部分を除けば、ほとんど両者の意識に違いがないことが示されたのである。これを、事実としてまず受け入れることが、現在の在日韓国人を理解する上でも、また彼らの韓国語学習の将来を考える上でも、重要な出発点になるのではないかと考えられる。

最後に、第6章において、本研究の調査の不備であった点を反省すると共に、今後このテーマを深く掘り下げるための課題のいくつかを指摘した。